

悲惨な生の方へ

—— ジョルジュ・バタイユ「モロイの沈黙」をめぐる ——

井 岡 詩 子

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本稿の目的は、ジョルジュ・バタイユの著作に散見される悲惨さ、窮乏、凋落といったモチーフの重要性を指摘し、バタイユ思想におけるそれらの位置づけを明らかにすることにある。その際、サミュエル・ベケットの小説『モロイ』に寄せて書かれた書評「モロイの沈黙」(1951年)で描きだされるモロイや浮浪者という「悲惨な」形象を中心に、そのほかの近似する形象も考察の対象とした。

バタイユが憧れと恐怖の感情とともに語るモロイや浮浪者の悲惨さとは、目的や結果に従属した行動の放棄の結果として生じる。これは『至高性』で描きだされる近現代社会での芸術家(あるいは作家)の落伍や窮乏と同様の構図において理解されるものである。バタイユにとって芸術作品や文学作品をつくりだすことは、非従属的な行為にほかならない。それゆえ、労働や理性という従属性へ傾いた近現代社会で非従属的な芸術をおこなう作家や芸術家は社会的な落伍を余儀なくされるのである。バタイユはこのような悲惨さを文学のあり方に結びつけるとともに、人間性と結びつけもする。悲惨さが喚起する恐怖こそが、ひとびとを人間性(理性や叙述など)へ駆り立てると言うのである。これは、ヘーゲル哲学における死への不安にも認められる役割だ。また、晩年の草稿「遊び」でバタイユは、ヘーゲル的な主人の形象を最終的に窮乏者と呼んでいる。バタイユが主人としての至高な生にこそ意義を見出していたことに鑑みると、モロイや浮浪者という悲惨な形象は至高な生の一側面でもあると解釈できる。さらにこのような悲惨さは、非従属的な行為の結果としてだけでなく非従属的な行為そのものとして、恍惚を引き起こす「反抗(違反)」と等しい価値をもつと考えられる。『ニーチェについて』のなかの「頂点と凋落」では、凋落した状態に留まるという選択に、そのような反抗としての可能性が見出されているのである。以上を通して、「悲惨な」生にたいするバタイユの評価を浮き彫りにした。

はじめに

「モロイの沈黙」(1951年)は、ジョルジュ・バタイユ(Georges Bataille, 1897-1962年)がサミュエル・ベケットの小説『モロイ』(1951年)に寄せた、そう長くはない書評であり¹⁾、これまであまり注目を浴びることのなかったテキストである。それではなぜ、あえてこの書評を取り上げるのだろうか。はじめに、その背景を概観する必要があるだろう。

「モロイの沈黙」が執筆された第二次世界大戦後からバタイユの晩年にかけての時期は、文学について、かれがもっとも多くを語った時期と言える。この時期のバタイユ思想における文学を考察する際、頻繁に参照されるのは、バタイユ唯一の自選評論集『文学と悪』(*La littérature et le mal*, 1957年)である。バタイユはその序文において、文学の表現するものとは悪であると言い、また、文学とはコミュニケーションあるいは「ふたたび見出された幼年期」であると述べている(IX, pp.

171-172)。これまでのバタイユの文学論にたいする研究は、このようなバタイユ自身による規定に則ったかたちで進められてきたと言えるだろう。たとえば、悪に着目したものとしてはジャン＝ミシェル・エモノ³⁾の研究が、コミュニケーションについてはフランソワ・ビゼ³⁾や福島勲⁴⁾の研究が挙げられる⁵⁾。とりわけエモノと福島の研究は、バタイユ思想において重要な役割を果たす「供儀(sacrifice)」や「違反(transgression)」(あるいは「隷属の拒否」といった語を通して、バタイユ思想における文学の役割や在り方を明らかにしている。

ところで、バタイユによる書評や文学論が多く執筆された時期、すなわち第二次世界大戦後のかれの思想の特徴に、近代以前と以後の社会体制にたいする区別がある。詳細は後述するが、近代以後の社会において「供儀」あるいは「違反」は、社会体制から排除されるべきものとなる。それゆえ、近代以後の社会において「供儀」や「違反」をおこなうことは、個人的な死への接近だけでなく社会的な落伍を引き起こすとされる。これは、近代以前の社会で「供儀」や「違反」を担う者が、王や貴族、宗教的な有力者などの特権的な立場にあったこととは対照的だ。バタイユが文学と芸術に「供儀」や「違反」を担う役割を見出すのは、まさに近代以後の社会においてであるので、バタイユは近代以後の社会における作家あるいは芸術家の運命を社会的な落伍に見出している。したがって、第二次世界大戦後のバタイユ思想における文学を考察するには、近代以前の「供儀」や「違反」には認められない側面、すなわち社会的に排除されるものであり、その行為者は落伍を余儀なくされるという性質を看過するわけにはいかないだろう。実際、『文学と悪』のとりわけカフカ論において、作家は社会的に弱い立場に置かれ、死へ呑み込まれてゆくものとして描きだされている。そのような側面こそが、近代以前の「供儀」や「違反」から文学および芸術(すなわち近代以後の「供儀」や「違反」)を区別し、その固有性を明らかにすると言えるのではないだろうか。

だが、これまでの研究においては、どちらかと言えば近代以前の「供儀」や「違反」と文学の類

似性がおもな考察対象となっていたと言わざるを得ない。もちろん、うえて述べたような側面が全く言及されていないわけではない。たとえば福島は、作家は「社会から放逐される危険と背中合わせ」⁶⁾であり、無力な存在であると指摘している。このような指摘をさらに深化させることに、本稿の目的がある。つまり、文学や作家の弱さや無力さの内実を詳らかにするとともに、そのような側面にたいするバタイユの見解を明らかにすることである。そして、その際、おおいに示唆を与えてくれると考えられるのが「モロイの沈黙」というテキストなのだ。この書評では、不自由な身体で森をさまよい歩くモロイや、バタイユが少年時代に出会った浮浪者(vagabond)からつくりだされた形象といった、「悲惨さ」をあらわす形象に文学の在り方が映し込まれている。詳細な議論はのちに譲るとして、ここではひとまず、このような悲惨さはおそらく、近代以後の社会における文学の無力さと共通の原因によるとだけ言っておこう。また、モロイや浮浪者の悲惨さによってあらわされる文学観は、『文学と悪』のいくつかの章で描きだされるような文学観、すなわち、自由や「幼年期」を謳歌し、死や自己破壊にむかいながらも勇ましく言葉の「供儀」をおこなう人物たち(サド、エミリー・ブロンテ、プルーストなど)によって示される文学観とは明らかに異なる。以上から、この書評を扱うことでこそ、バタイユの文学観のうち、これまで充分には議論されてこなかった側面、近代以後の「供儀」や「違反」を近代以前のそれらとは区別するような側面を、考察の対象とすることが可能になると考えられるのである。

また、バタイユ思想における「供儀」や「違反」の問題が、人間の生の問題と密接な関係にあることを付言しておきたい。それらは、バタイユが人間の生の本質的な部分と捉える至高なモメントをかたちづくるものなのだ。したがって、近代以後の「供儀」あるいは「違反」である文学(芸術)の在り方は、近代以後の至高な生がどのようなもので在り得るのかを示唆していると言える。ゆえに、モロイや浮浪者の形象によって描きだされる文学の悲惨さを浮き彫りにする本稿の試みは、

至高な生の一側面として悲慘な生があることを明らかにするだろう。

本稿の手順は以下の通りである。まず、モロイや浮浪者の形象の悲慘さがなにに起因するものであるのかを詳らかにし、その悲慘さによって示されるバタイユの文学観を考察する。その際、『至高性』(La souveraineté, 1953-56年、未完)で言及される作家や芸術家の窮乏した境遇を参照する。それによって、近代以後の社会における文学や芸術は、半ば必然的に悲慘な側面をもつことが理解されるだろう。このような見解に照らして「モロイの沈黙」を読解することで、モロイや浮浪者が文学や芸術のそのような側面を、ほかよりも全面的に引き受ける形象であることが指摘される(第一節)。つぎに、モロイや浮浪者の形象の悲慘さが、文学や芸術の在り方だけでなく、バタイユが希求する至高な生のひとつの在り方をも象徴していることを明らかにする。そこでは、バタイユ思想におけるヘーゲル哲学の影響と、晩年のバタイユが遺した「遊び」という短いテキストに着目する(第二節)。ここまですて見出されるのは、モロイや浮浪者が体現する悲慘さの、至高な生の追求の結果としての側面である。だが、かれらの悲慘さはそれ自体、至高な生の追求であり得る。このような解釈の可能性を、「頂点と凋落」というテキストを手助けにしながら示す(第三節)。以上のように本稿では、「モロイの沈黙」という書評を読み解くために、バタイユ思想に散りばめられた、悲慘さや窮乏、凋落などの一見否定的なニュアンスをもつモチーフを取りあげる。そのなかで、悲慘な生へのまなざしがかれの思想に通底していることを浮き彫りにすることができるだろう。

1. 文学とモロイの悲慘さ

「文学は、必然的に死へ通じるのと同様に〔中略〕『モロイ』のはかり知れない悲慘さ〔misère〕に通じている」(XII, p. 88)と述べることで、バタイユは『モロイ』とその悲慘さを文学の在り方の象徴に置いている。まず明確にすべきは、この悲慘さにたいするバタイユの評価である。バタイユは「モロイの沈黙」の冒頭部分(XII, pp.

85-87)で、『モロイ』という作品が表現する「純粹状態の現実」に恐怖を見出しながらも、モロイや浮浪者にたいする憧れにも似た感情を吐露する。本節では、悲慘さにたいするバタイユの見解を跡づけるとともに、それらの悲慘さがもつ意義を検討する。

そのために、先述した近代以後の社会における作家や芸術家の社会的な落伍について、その構造を理解しておこう。というのも、そのような落伍と本論で問題となっている悲慘さは、共通の理由によると考えられるからである。参照するのは、近代以前の社会から近現代社会にかけての「供儀」や「違反」、そしてそれを担う者たち(かれはときに、至高者と名指される)を主題とした著作『至高性』の、第四部第四章「現代と至高な芸術」である。タイトルには明示されていないが、ここで問題とされているのは文学と造形芸術だ。バタイユはそこで、「芸術の至高性は、それを有する者にはみな、落伍することを要求する」(VIII, p. 450)と述べている。どういうことか。

ある程度の単純化を恐れずに言うならば、『至高性』という著作の中心的な概念「至高性」の本質は「人間の生において、隷従的で従属した様相に対立する様相」(VIII, p. 247)と言える。このような非従属性への志向は、とりわけ戦後のバタイユ思想において顕著だ。実のところ、バタイユにとって、ある行為が従属的であるか否かを規定する基準は、第一に、その行為がなんらかの有用性に捧げられていないか、第二に、有用性への反抗である非従属的な行為が他者のためのものではないか、である。バタイユは、近代以前の社会における至高性をつぎのように捉えていた。近代以前の社会では、王や貴族、宗教的な有力者といった、労働する必要のない特権的なひとびとに至高性が占有されていた。特権者を除く大半のひとびとの労働が、有用性ととともに特権者(の至高性)にも従属することで、特権者の至高性が可能となっていたのである。特権者たちは時折、富(有用なもの)の破壊的消費である供儀や祝祭を通して、みずからの至高性を表明した。特権者以外のひとびとが至高なモメントを生きることができたのは、まさにこの機会である。かれらは特権者た

ちが表明する至高性を観ることで、それを可能にしたのだ。それゆえ、特権者の存在や定期的な祝祭の開催を維持していた近代以前の社会は、その制度の内に、有用性への従属と反抗の双方を含有していたと言える。そのような社会での作家（あるいは詩人）や芸術家の役割は、特権者たちの至高性を表現することであり、そのかぎりにおいて、かれらは他者の至高性に従属した存在であった（VIII, p. 247, pp. 440-441）。

たいして近代以後の社会は、有用性への従属のみをその制度に取り込むことで、富の蓄積と社会の成長に集中するものである（VIII, p. 432）。バタイユはこのような議論のなかで、近代以後の社会における至高性の可能性、すなわち他者に従属することのない、有用性への反抗を芸術に見出し（VIII, p. 300）、つぎのように述べている。

現代において、至高な芸術のひとつはもともとありふれた境遇、すなわち窮乏した境遇にある。取るに足りない資産に恵まれていようとまいと、窮乏はかれの宿命であり、序列体系の底辺こそがかれの唯一の階級なのだ。（VIII, p. 449）

バタイユは近現代芸術を、他者の至高性を表現する役割から解放され、ついにそれ自体が至高なものとなったとみなす⁷⁾。だが、有用性への従属のみに傾いた近代以後の社会において、有用性への反抗である芸術、あるいはその反抗を権威ある他者（特権者たち）に帰属させ得ない芸術は、その行為者に社会的な身分の失墜を余儀なくするのである。芸術が至高なものであるためには、あらゆる有用性への不服従が要求される。至高性に肝要なものであるこの不服従こそが、芸術家に窮乏を強いるのである。ひるがえせば、芸術家の窮乏とは、かれが有用性に反抗し、至高な芸術をなしたことの証左とも言えるであろう。その点に、落伍や窮乏という境遇に肯定的な意義を見出す可能性が潜んでいるのではないだろうか。「至高な芸術と窮乏との親密性は、その根本において、企て[l'entreprise]への嫌悪においてのみ機能するものである」（VIII, p. 449）という記述には、有用

性への反抗と関係のない窮乏は度外視されるべきであることが示唆されている。ゆえに、バタイユが落伍や窮乏を肯定的に評価する場合、そのような落伍や窮乏は有用性への反抗と結びついていると考えることができる。

以上のような、至高な芸術と落伍や窮乏の関係を念頭に置いて、『モロイ』の悲惨さについて考察を進めよう。ここでは、ふたつの次元で悲惨さを捉えなければならない。すなわち、『モロイ』という作品の悲惨さと、モロイや浮浪者という形象の悲惨さである。この両者を明らかにすることで、創作活動に関わる側面と作品の内容に関わる側面の双方から文学の「悲惨さ」を明らかにすることができると思われる。

まず、一見してそれが悲惨であることが明らかな、モロイや浮浪者の形象を取りあげよう。さきにも述べたように、バタイユは「モロイの沈黙」の冒頭部分で、モロイや浮浪者にたいする憧れのような感情を吐露している。以下の箇所から、モロイや浮浪者にたいするバタイユの評価は、基本的に肯定的なものであることがわかる。そして、モロイや浮浪者にたいして、非従属的な在り方、つまり、芸術家の落伍や窮乏に帰結するのと同様の在り方が見出されているのである。

もしわたしが寒さやひもじさ、人間を打ちひしぐさまざまな面倒事をものともせずにいられるのなら、自然のなかへ、雨へ、大地へ、世界と事物への果てしない埋没へと身をゆだね、みずから主人公モロイとなるだろう。わたしやあなたも、その人物には不意に出会っているはずだ。われわれが街角でその人物に出くわしたとき、わたしは戦慄するような羨望でもって、檻樓の逃げがたい気高さがおりなす名づけ得ない形象、その眼差しの無気力と無関心、そして積年のしみついた不潔さを捉えたのだ。かれは、とうとう操縦不能⁸⁾となつてしまつた存在であり、われわれみんながそうである企ての、漂流した状態にあったのである [l'entreprise, que nous sommes tous, à l'état d'épave] ……。(XII, p. 85)

「企て」とは、未来に予想される結果に現在の行為に従属させることである。この引用箇所でもロイやそのヴァリエーションとしての浮浪者に認められている「漂流した」企てとは、結果や目的から解き放たれ、従属先を失ったものと考えられる。これはおそらく、母を探すという目的をもちながらも、その目的に向かっているとは言い難い『モロイ』の物語の進行、つまりモロイの彷徨に対応するものである。この箇所に続く部分では、漂流した状態にある企てが「完璧な浮浪者 (*vagabonds achevés*)」や「惨めな者 (*miserable*)」、「名づけ得ない者 (*innommable*)」、「亡霊 (*spectre*)」、「身を引きずるように通りをゆき、われわれを魅了する残骸」などさまざまに言い換えられる。この書評が喚起する悲惨な形象の基礎には、非従属性があるのである。また、引用箇所やこれらの表現からは、非従属性による悲惨さにたいしてバタイユがもつ両義的な感情が認められる。つまり、恐怖と憧れ（あるいは羨望）の感情である。

このような感情については第三節で言及することとして、ここでは、バタイユが、モロイという表象だけでなく、現実の浮浪者にたいしても同様の感情を抱いていたことを付け加えておこう。それは、この書評の冒頭に付された註に見出される。バタイユはそこで、みずからが遭遇したふたりの浮浪者に言及し、窮乏した生活を幸福だと語る浮浪者に少年時のバタイユが抱いた感嘆と恐怖、そして、土砂降りの雨のなか横たわる浮浪者にバタイユが見出した治療の拒絶という態度を語るのである。浮浪者という立場が労働の拒絶を意味しているのだとすれば、浮浪者が語る幸福とは、有用性への反抗という幸福と考えられる。この箇所においても、非従属的な在り方が窮乏や悲惨な境遇に帰結すること、また、そのような境遇に置かれた人物が恐怖と憧れの感情を喚起することが認められるのである。

以上のように、モロイや浮浪者という形象の悲惨さは、かれらが非従属的な生を生きていることを示すとともに、それを目にする者に恐怖と憧れの感情を呼び覚ますものであることがわかった。みずからがそれに没入することを望むかは別として、基本的にバタイユはこのような悲惨さを肯定

的に評価していると考えられる。ならば、このような悲惨さの形象を描きだしたベケットのことも同じように評価して然るべきであろう。ところが、バタイユはベケットを、非従属的な生の一形態を描きだした作家として評価するのではない。むしろバタイユは、書評の冒頭でかれが読者に提示したような浮浪者（あるいは名づけ得ない者）の形象を意図して、ベケットがモロイを描いたわけではないとさえ述べるのである。このような捻れがおそらく、『モロイ』という作品の悲惨さを生みだしている。

バタイユは、モロイや浮浪者のような形象を表現し得るのは「自制のない言語の流出のみ」であると述べる。そのうえで、ベケットがそのような形象を描きだすことができた要因を「作家であることの放棄」に見出す。「作家であることの放棄」とは、「もはやエクリチュールをみずからの意図を表現する手段に陥らせず、言葉の大海の騒乱を横断する深い潮流のなかで、雑然とながらも与えられる可能性に応えることを受け入れる」(XII, p. 87) ことである。このことから、「自制のない言語の流出」とは、みずからの意図を表現するという目的からのエクリチュールの解放によって引き起こされるものであり、それゆえ非従属的なエクリチュールのことだと考えられる⁸⁾。このようなエクリチュールを生みだすことである「作家であることの放棄」については、『文学と悪』に収められたジュネ論と比較対照することでより理解されやすくなるだろう。そこでは、ジュネのエクリチュールがふたつの点から批判されるのだが、その二点にエクリチュールの従属的な使用が関わっているのである。それは、スキャンダラスな内容を表現しようとするあまり、きらびやかで安易な言葉が多用されている点と、そうやって書かれた物語が世間的な成功（つまり、作家としての成功）や見た目の華やかさへの偏愛に従属させられている点だ (IX, pp. 304-305)。ジュネは、エクリチュールを制御し、みずからに従わせることで作家としての成功を得る。これにたいしてベケットは、少なくとも『モロイ』の執筆において、目的から解放されたエクリチュールに翻弄されるがままになっているのである。この対照からわか

るのは、「作家であることの放棄」という語が示唆しているのは、有用性への反抗としての文学を突き詰めてゆくことが、必然的にその行為者（つまり作家）の否定を内包しているということである。また、そのようなかたちで追求された文学は、ジュネの物語がもつような華やかさをもつものではあり得ない。バタイユは非従属的なエクリチュールによって紡がれた文学を建物に譬えて言う。「それはもはや、開け放たれた戸口や窓から風雨の吹き込むのを、そのままにしているような、無人の館にすぎない」（XII, p. 88）。

文学のこのような側面こそが、バタイユが『モロイ』のはかり知れない悲惨さと呼んだものなのではないだろうか。すなわち、非従属的な在り方を追求するあまり、作家は否定され、そこにはただ廃墟のような作品が残るのみであるような、文学の極限的な在り方である。

ここまで、「モロイの沈黙」におけるふたつの悲惨さの内実を明らかにすることを試みた。この書評では、『モロイ』の主人公であるモロイという形象と、その形象が生みだされる過程の双方に、有用性への反抗、あるいは非従属的な在り方への志向が見出されていることがわかった。この書評がしばしば強調する悲惨さとは、そのような反抗や志向の極限的なかたち、すなわち文学の極限的なかたちなのである。その点で、『至高性』で提示される作家と芸術家の社会的な落伍や、『文学と悪』のカフカ論で示唆される、死や消滅へ飲み込まれてゆくものとしての作家と作品の在り方（IX, p. 271, p. 279）を、より全面的なかたちで引き受けているのが、モロイや浮浪者という形象だと言うことができるだろう。

2. 至高な生の悲惨さ

前節では、モロイや浮浪者の悲惨さが、非従属性を極限まで推し進めた文学の在り方を体現していることを詳らかにした。本節では、非従属性が人間の生の至高なモメントをかたちづくるものであることに立ち返り、モロイや浮浪者の悲惨さが、文学だけでなく至高な生のひとつの在り方をも表現していることを指摘したい。これは同時に、こ

の書評がもつ射程の広がりを示すことでもあるだろう。

バタイユはモロイや浮浪者がわれわれに喚起するものをさまざまに言い換えているが、そのなかに「人間性の不在（absence d'humanité）」という語がある。書評の全体を通して、この語はしばしば用いられる。それは、モロイや浮浪者をわれわれ人間という存在に結びつけるときも同様だ。

死と、生における死の面影であるあの「人間性の不在」というふたつのよく似た真実は、神話というかたちのもとでしかわれわれのうちに具体化し得ない。このような現実の不在は、実際、言説の明晰な区別においてはあたえられない。しかし、死にせよ非人間性にせよ、ともに存在しないとはいえ、われわれがそうであるところの存在にとってどうしても良いものではあり得ない。それらは、存在の限界であり、背景であり、最終的な真実であるからだ。死のみが不安の隠れた基盤なのではない。もし悲惨がわれわれをすっかり飲み込み、分解してしまうのなら、悲惨があらゆるものを沈めてしまうところの空虚もまた、死と同様、そのポジティブな一面が完全な人間性であるような、あの恐怖の対象なのだ。（XII, pp. 92-93）

この直前の箇所では、神話は「途方もないものであり、理性の眠りから生じるもの」と規定され、前節で確認した『モロイ』におけるベケットのエクリチュール、すなわち作家の意図を離れた言語の流出としてのエクリチュールと結びつけられている。言葉の従属的な使用に理性のはたらしを見出すならば、言葉や会話から見捨てられ「死に劣らず無言」（XII, p. 86）とされる浮浪者もまた、このような神話のひとつに数えることができるだろう。注目すべきは、死と「人間性の不在」が完全に同一視されているのではなく、人間性⁹²との関係において同様の位置にあるとみなされていることだ。死と「人間性の不在」は、ともに不安の基盤、あるいはこう言って良ければ、人間性とネガと捉えられているのである。

それでは、不安の基盤あるいは人間性のネガとは、どのようなものとして解釈されるべきだろうか。バタイユは、上記の引用に続く箇所では、モロイや浮浪者のすがたが人間に抱かせる恐怖の帰結に「人間的な身振りや正しい態度、明晰な言葉」を置いている。ここに、「人間性の不在」を体現する形象の逆説的なはたらきを見てとることができる。すなわち、それらの形象は、不安や恐怖を喚起することによって、存在を人間性へ駆り立て、人間性を成り立たせているのである。このようなはたらきをする不安や恐怖については、ヘーゲルの「主人と奴隷の弁証法」における死の役割の影響を認める必要があるだろう¹⁰⁾。その詳細はここで述べるまでもないが、「主人と奴隷の弁証法」において死は、ふたつの重要な局面をかたちづけている。ひとつは「主人」が「主人」たる条件であり、そこでは死をものともせず死に立ち向かうことが求められる。しかし、ヘーゲルが描きだす人類の歴史では、最終的には、死をものともしない「主人」ではなく、死への恐怖により労働へ駆り立てられ、そうすることで自己を高めた「奴隷」のほうに人間としての完成が見出される。ヘーゲル的な歴史の終焉に至る過程のなかで死は、不安や恐怖を与えることで、労働をはじめとした人間性の生成を人間に促す役割を果たすのである。

したがって、バタイユは「モロイの沈黙」において、不安の基盤としてのヘーゲル的な死に「人間性の不在」を並立させているのである。このようなバタイユの操作は、「主人と奴隷の弁証法」という人間の完成の物語に、モロイや浮浪者という形象を付け加えようとする身振りや解釈できるのではないだろうか。とはいえこの形象は、「主人」でも「奴隷」でもない第三者というよりもむしろ、死をものともしない「主人」のヴァリエーションとみなすべきだろう。前節で見たように、モロイや浮浪者は漂流した状態の企てであり、われわれに非従属的な生の一様相を示す。同時に「主人」もまた、バタイユにとって、非従属的な生のひとつなのである¹¹⁾。モロイや浮浪者と「主人」の親近性をより強調するには、バタイユの晩年に書かれたとされるある草稿を参照することが望ましい。そこでは、非従属的な態度を示す「主人」

が「窮乏者 (indigent)」として描きだされているのである。計画されながらも実現には至らなかった著作『純然たる幸福』の草稿に分類される、「遊び (Le jeu)」と題された短いテキストがそれである。そこでは、本稿で人間性の成り立ちについて確認したのと同様の構造をもつヘーゲル的な労働観、すなわち死にたいする不安がひとびとを労働へ駆り立てるという労働観が踏襲され、『精神現象学』を彷彿とさせる「主人」と「奴隷」の二項対立が「遊ぶ者 (qui joue)」と「働く者 (qui travaille)」のそれに読み換えられる。そのうえでバタイユは、つぎのように書いている。

働く者は、したがって、死が近づいてくるのを感じる。死は遊ぶ者をさいなみはしないが、死の影は労働に広がっているのだ。労働の遂行は怖れというかたちで死の深刻さを告げるのだが、この怖れによって労働はなされるのである。働かない窮乏者は食べないが、食べなければ死が約束されている。(XII, p. 547)

ここで「働かない窮乏者」と呼ばれているのは、働く者の対立項たる遊ぶ者、すなわち「主人」で間違いないだろう。非従属的に生きること、とりわけ近代以後の社会を特徴づける規範である有用性に反抗することが、落伍や死という帰結を招く一連の流れがこのテキストでも前提とされているのだ¹²⁾。それゆえ、モロイや浮浪者は、作家や芸術家だけでなく、死をものともしないがゆえに死へ呑み込まれてゆく「主人」とも踵を接する形象なのである。

最終的にヘーゲルは「奴隷」の生に軍配をあげるとさきに述べたが、バタイユはあくまで「主人」としての生にこだわりつづけ、その至高な生を希求した¹³⁾。かれの最晩年のテキストである「遊び」においても、バタイユは「主人」の運命に窮乏を認めながらも、その生に魅力を見出している。これは、モロイや浮浪者にたいする憧れや羨望の感情と地続きにあると言えるだろう。本節で見たようなバタイユの身振り、すなわち、人間の完成の物語にモロイと浮浪者の形象を付け加える身振りや、「主人」を窮乏者としても描きだす

という身振りは、それらの形象が示す悲惨さが、至高な生の看過できない側面であることを示唆しているのである。

3. 悲惨さそれ自体における反抗

本稿ではここまで、モロイや浮浪者の悲惨さに、文学と至高な生の在り方を見出してきた。かれらの悲惨さとは、有用性への反抗の結果、すなわち非従属的な在り方を推し進めた結果として、文学や至高な生が引き受けざるを得ないものであった。それゆえこのような悲惨さは、非従属的であることの証左としての価値をもつと考えられる。とはいえ、悲惨な形象が恐怖とともに憧れの感情を喚起するとみなされていることに鑑みると、悲惨さがそれ自体としてなんらかの価値を有するものである可能性も否定できないだろう。本節では、悲惨な形象のより積極的な意義をあきらかにすることを試みる。その際、「モロイの沈黙」を締め括る段落のつぎの箇所が示唆的だ。

こうして、文学はどうしても存在や世界を蝕む、ある結果からほかの結果へ、ある成功からほかの成功へと勇ましくゆくわれわれのこの足取りを無にしていまいながら（しかしこの無とは、恐怖のことだ）、このことは、文学に与えられた可能性を汲み尽くしはしない。また、有用なこととは異なる目的に言葉を使用することが、逆の方向に、反抗の恍惚、すなわち分別なき果敢さの恍惚の領域をひらくということも確かなのだ。しかし、このふたつの領域——恐怖と恍惚の領域——は、われわれが思っているよりもずっと、相互に似通っているものなのである。（XII, p. 94）

この箇所では、「有用なこととは異なる目的に言葉を使用すること」である文学に、ふたつの可能性が見出されている。ひとつは、この書評を通して明らかにされ、モロイや浮浪者がその象徴となっている恐怖の領域の可能性であり、もうひとつは恍惚の領域の可能性である。バタイユの文学論を見渡せば、文学の恍惚の領域の可能性に向け

て書かれたテキストを見つけだすのは困難ではないし、むしろ恐怖よりも恍惚の領域の可能性のほうが、かれの文学論を特徴づけていると言っても過言ではないだろう。たとえば『文学と悪』では、とりわけエミリー・ブロンテの章¹⁴⁾とブルーストの章¹⁵⁾に、有用性への反抗による恍惚の契機が認められる。

恍惚と恐怖、すなわちエミリー・ブロンテやブルーストのような「果敢さ」の形象とモロイや浮浪者という悲惨な形象は「相互に似通っている」。バタイユによるこのような規定を考えると、『ニーチェについて』（*Sur Nietzsche: volonté de chance*, 1945 年）に収録された「頂点と凋落（Le sommet et le déclin）」というテキスト（および、本稿では註に例を挙げることになるが、『ニーチェについて』を含む「無神学大全」三部作に散りばめられた、疲労や衰弱、意気消沈などの状態）がひとつの答えを与えてくれる。このテキストでは、エロティスムや饗宴、笑い、祝祭といった非従属的な生における恍惚状態が「頂点」と呼ばれ、「凋落」した状態と対比される。上昇と下降のイメージを伴うこの対に関して、先行研究¹⁶⁾ではバタイユ思想における頂点の重要性という観点からのみ解釈され、凋落の内実とその価値は等閑に付されてきた。

しかし、凋落した状態の内実に視線を投げかけると、それがモロイや浮浪者の悲惨さとほとんど等しいものであることがわかる。つまり、凋落とは、非従属的な在り方が帰結するところの状態なのである¹⁷⁾。頂点と凋落の切り離し難い関係を、バタイユは以下のように述べている。

わたしはつぎのことを否定できない。すなわち、凋落とは不可避のものであり、頂点それ自体がそのことを指し示しているということを。頂点が死ではない場合、頂点はそのあとに降りる必要性 [= 凋落する必要性] を残しておくのである。頂点とは本質的に、極端な場合には生が不可能となるような場所であるのだから。（VI, p. 57）

くわえて、頂点のあとに訪れるものとしての凋落

は、道徳的規範（すなわち、有用性の世界の原則）を形成するものとみなされている。バタイユは、「力を蓄積する必要性に追いやられて」（VI, p. 59）おり、「存在を維持し富ますことへの配慮にのみ価値を見出す」（VI, p. 42）状態である凋落に、有用性への従属を促す役割を見てとるのである。これは、前節で確認したヘーゲル的な死、あるいは「人間性の不在」と同様の役割と考えられる¹⁸⁾。

注目したいのは、凋落した状態のうちに、頂点と同様の価値をもつ可能性がほのめかされていることである。それは、つぎの箇所認められる。

現在わたしがしているように語るということは根本的には、病人のように寝ること、正確に言えば、死ぬために寝ること、それでいて治療を要求しないことである。[中略] そんなふうに語りながらわたしは、頂点の自由な空気を吸っているような気がするのだ。（VI, p. 63）

バタイユはこの箇所の直前で、みずからの営為は、答えを設けることなく思考し語ることだと言う。それは、思考や叙述から答えという目的、あるいは終着点を奪うことにほかならない。したがって、ここでのバタイユの思考と言葉は、非従属的なものである。このような営為において、かれには頂点への可能性がひらかれていると考えられるが、同時に、答えのない思考には完遂される可能性や停止する契機が存在しない。そのため、非従属的な仕方でも思考し語る主体の力は汲み尽くされ¹⁹⁾、かれは凋落した状態を余儀なくされる。上記の引用箇所が示しているのは、そのような凋落においてもなお、道徳的規範に従うほうへ舵を取ろうとはしない態度である。「治療を要求しない」ことは、凋落した状態に留まることとみなし得る²⁰⁾。そこにおいてバタイユが「頂点の自由な空気を吸っているような気がする」と述べていることから、「力を蓄積する必要性に追いやられ」ながらもその必要性に応えず、いわば極限的な凋落、あるいはモロイや浮浪者の悲慘さに留まること自体、有用性への反抗のひとつのかたちであると考えら

れる。かくして、凋落や悲慘さは、非従属的な在り方の結果としてだけでなく、非従属的な在り方そのものとしての価値をもつようになるのである。

モロイや浮浪者にたいしてバタイユが表明する憧れの感情は、その非従属的な在り方そのものとしての価値に向けられていると言えるだろう。実際、第一節で触れたが、バタイユは浮浪者に「治療の拒絶」を見出すことで、かれらに有用性への反抗の身振りを期待する。つまり、「治療の拒絶」は、凋落した状態、あるいは悲慘さに留まるという選択、近代以後の社会が抛るところの有用性の原則には従わないという選択を象徴しているのである。バタイユが、恐怖の領域（モロイや浮浪者の領域）と恍惚の領域が相互に似通っているとするとき、そこで想定されているのは、有用性や従属的な在り方を受け入れまいとする態度だろう。

む す び に

以上、「モロイの沈黙」におけるモロイと浮浪者という形象をめぐる、悲慘な生がバタイユ思想のなかで占める位置と重要性を明らかにした。悲慘な生とは、至高な生の追求が否応なしに引き受けざるを得ないものであると同時に、それ自体、有用性への反抗となり得るものであった。

さいごに、モロイや浮浪者という形象、そして悲慘な生としての至高な生の固有性を強調するために、つぎのことを指摘しておきたい。それは、頂点や恍惚が瞬間的なものとみなされるのにたいし²¹⁾、凋落やモロイ、浮浪者の悲慘さは持続性においてこそ価値をもつという点である。頂点への到達は、そのための力を蓄える従属的な生（凋落した時点からはじまる、道徳的規範に則った生）と、蓄えられた力や富によって有用性への反抗をおこなう非従属的な生のあいだを往還しながら目指される。それにたいして悲慘さは、非従属的な生へのいわば没入を意味するかぎりにおいて、より徹底された非従属性と言える。この事実は、前近代的な社会における至高者という存在と引き比べたとき、より意義をもつように思われる。バタイユによれば、前近代的な社会の一般的な庶民の生活は、日々の糧を得るための労働の時間（従属

的な時間)と至高者がみずからの至高性を表明する祝祭などの時間(非従属的な時間)に分けられるものであった。だが至高者は、庶民の労働や芸術をはじめとしたあらゆるものをみずからに従属させ、豪華な生活のなかでつねに非従属的な時間を生きるとされる存在である(VIII, p. 270)。かれには、非従属的な生の時間のみが存在している。このような至高者のモデルが示すのは、至高性への瞬間的な到達というよりもむしろ、至高性を持続するさまである。したがって、持続的な悲惨さに身を置くことで従属的な時間を回避するモロイや浮浪者にこそ、現代における至高者の形象を見出すことができるのである。

注

- 1) 初出はつぎの通り。「Le silence de Molloy」, *Critique*, n° 48, mai 1951, pp. 387-396. なお、本稿ではバタイユのテキストはすべてガリマール社の全集を参照し、全集の巻数と頁数を記した。訳文は引用者によるが、既訳のあるものは適宜参照した。引用文中の傍点による強調は原文イタリック体、[] 内の補足は引用者による。
- 2) エモネは、「無神学大全」三部作(*L'Expérience intérieure*, 1943, *Le coupable*, 1944, *Sur Nietzsche, volonté de chance*, 1945)の時期のバタイユ思想を代表する「供儀」の一種として、文学が表現するところの悪を解釈している。Jean-Michel Heimonet, *Le mal à l'œuvre: Georges Bataille et l'écriture du sacrifice*, Edition Parenthèses: Marseille, 1986.
- 3) François Bizet, *Une communication sans échange: Georges Bataille critique de Jean Genet*, Droz: Genève, 2007.
- 4) 福島によれば、バタイユが文学に認めた価値とは、他者との合一の不可能性にさらされながらもコミュニケーションを続けることのできる場としての価値である。福島勲『バタイユと文学空間』水声社、2011年。
- 5) 「ふたたび見出された幼年期」としての文学の在り方については、つぎの論文で明らかにした。井岡詩子「文学における「子ども」らしさと至高性——バタイユのニーチェ論とカフカ論の比較を通して」『表象』第9号、表象文化論学会、2015年、197-212頁。
- 6) 福島勲『バタイユと文学空間』水声社、2011年、25頁。
- 7) むろん、近現代社会における芸術がすべて近現代芸術とみなされているわけではない。バタイユは『マネ』(Manet, 1955年)のなかで近代絵画の誕生を跡づけているが、その議論を参照すると、戦後のバタイユ思想における「禁止と違反」の理論によって捉えることのできる芸術こそが、近現代芸術であり、供儀や祝祭の後継となるものであることがわかる。
- 8) エクリチュールの目的からの解放とまではいかないが、それに似た例としてバタイユは、なにかを表現するという目的に抵抗する行為としての描画行為をマネに見出している。マネはティツィアーノの《ウルビーノのヴィーナス》を模倣しながらも女性像を娼婦として描きだすことで《オランピア》を完成させたが、それはバタイユにとって、絵画がそれまで目的としてもっていた神話的な主題を破壊することなのである。『マネ』における主題の破壊というテーマに関しては、つぎの論文を参照されたい。井岡詩子「ジョルジュ・バタイユ『マネ』における「沈黙」の様相」『美学』第65巻1号(通号244号)、2014年、25-36頁。
- 9) バタイユの著作内での「人間性(humanité)」という語の使用には注意を払わなければならない。かれは、その思想のなかで混同してはならないふたつのものにたいしてこの語を用いるのである。それは、理性や言葉、道徳などの動物から人間を区別するものと、それらへの反抗である供儀や祝祭、非従属性など人間の生の「至高な部分」だ。同一のテキスト内で、この語の矛盾する使用がおこなわれる例はほとんど認められないので、各テキストの文脈にしたがえば読み違えることはないだろう。
- 10) バタイユにおけるヘーゲル哲学の理解は、ほとんどコジェーヴに依るものだと考えられる。したがって本稿の執筆にあたっては、おもに『ヘーゲル読解入門』(Alexandre Kojève, *Introduction à la lecture de Hegel: Leçons sur la phénoménologie de l'esprit, professées de 1933 à 1939 à l'École des Hautes-Études*, réunies et publiées par Raymond Queneau, Gallimard: Paris, 1947)を参照した。
- 11) バタイユは『モンド・ヌーヴォー=パリュ』誌に発表された「ヘーゲル、人間と歴史」で、「主人と奴隷の弁証法」にたいするみずからの解釈を明らかにしている(«Hegel, l'homme et l'histoire», *Monde nouveau-Paru*, n° 96, janvier 1956, pp. 21-23 et n° 97, février 1956, pp. 1-14)。
- 12) 同一の分類に帰属されるほかの草稿には「合理的な社会に火の文字で刻み込まれているのは「働かざる者食うべからず」という労働の原理である」(XII, p. 537)という記述が見出される。ここに、草稿「遊び」で「働かない窮乏者は食べない」と述べられている背景を読み取ることができるだろう。
- 13) たとえば草稿「遊び」では、遊び(あるいは賭け)にこそ人間の生の魅力があるとされ、その特権を有する者として主人が規定されている。また、このようなバタイユの姿勢は、歴史の終焉における否定性の残存、すなわち「用途なき否定性」の可能性として表明されてもいる(Denis Hollier, *Le Collège de Sociologie 1937-1939*,

- Gallimard : Paris, 1995, pp. 75-82).
- 14) 初出はつぎの通り, « Emily Brontë et le mal », *Critique*, n° 117, février 1957.
 - 15) 初出はつぎの通り, « La vérité et la justice », *Critique*, n° 62, juillet 1952, pp. 641-647.
 - 16) たとえば, つぎの研究に「頂点と凋落」のそのような解釈が認められる, 吉田裕『バタイユ聖なるものから現代へ』名古屋大学出版会, 2012年.
 - 17) 笑いやボエジー, 瞑想など「無神学大全」三部作の中心的なテーマの結果としての凋落した状態には, つぎのような例がある, 「あまりに笑ったせいで, わたしは疲労困憊した, そのように意気消沈しているみずからを, わたしは見出したのだ」(V, p. 80), 「捉えがたい言葉の世界に休みなく破滅をもたらさねばならない供儀執行人, すなわち詩人は, 文学の宝を豊かにすることにはやばやと疲れ果ててしまう, かれはそれを余儀なくされているので, もし詩人が文学の宝を豊かにすることへの関心を失ってしまうようなことがあれば, かれは詩人であることをやめることになるだろう」(V, p. 172), 「瞑想において, 主体は疲れ果てつつ自身を追い求める」(V, p. 219).
 - 18) 頂点のあとに訪れる凋落が道徳的規範をつくりだすことは, 『ニーチェについて』のつぎの箇所でも示唆されている, 「諸道徳, すなわち妥協の宗教であり知性の異常な発達であるものは, 祝祭の翌日の意気消沈 [dépression] によって生みだされる, ひとびとは【祝祭のあとの】余白の時間を生きねばならず, 身を整えて落着けねばならず, 不安を乗り越えねばならなかったのだ (不安とは, 罪や苦悩, 悔悟の感情であり, 祝祭の満ち潮が引いたときに残されるものだ), / わたしは, 祝祭の翌日に書いている…」(VI, p. 157).
 - 19) 同様の構造は, 『有罪者』(*Le coupable*, 1944年)におけるエロティスムと神秘体験の対比にも見出すことができる, 「神秘体験は, 十分にうまくやり遂げられるという点でエロティスムとは異なる, エロティックな過剰は, 意気消沈やうんざりとした気持ち, あるいはいつまでも続けることの不可能性に達するのであり, 満たされない欲望がその苦痛を仕上げるのである, エロティスムは, 人間の体力を越えている」(V, p. 247), バタイユにとって, 神秘体験が救済という目的に従属した行為であるのにたいし (cf. VI, pp. 55-56), エロティスムは生殖という目的から解放されている, この箇所からわかるように, 目的を達成したとみなされる時点で神秘体験は終わるが, 目的すなわち明確な完達のモデルをもたないエロティスムは, 人間の体力を汲み尽くし, 体力の限界に至るまで止まることがないのである.
 - 20) 凋落した状態に留まることを望む記述には, つぎのようなものもある, 「わたしは, ふたたび隷属に陥るよりも, 病身のまま, あるいは死に瀕して生きることを選ぶだろう」(VI, p. 13).
 - 21) バタイユの思想における「瞬間」の重要性をまとめたものとして, つぎの著作が挙げられる, 和田康『歴史と瞬間 ジョルジュ・バタイユにおける時間思想の研究』溪水社, 2004年.

Vers la vie misérable —— autour de « le silence de Molloy » de Geroges Bataille ——

Utako IOKA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Sommaire Cet article a pour objectif de faire remarquer à l'importance des motifs de la misère, du dénuement et du déclin chez Georges Bataille, mettant les positions de ces motifs au clair. Dans ce but, nous avons pour objet les figures « miséreuses », qui sont Molloy et vagabond de « le silence de Molloy », et les figures ressemblantes.

La misère de Molloy et les vagabonds dont Bataille a parlé avec l'envie et l'horreur est le résultat d'abandon des actions subordonnés à la fin. Elle a la même structure que le déclassé et le dénuement de l'artiste (ou l'écrivain) dans la société moderne (*La souveraineté*). De faire l'œuvre est, selon Bataille, l'acte non-subordonné. Donc, l'artiste et l'écrivain qui font l'œuvre dans ce monde-ci où il s'agit du travail ou la raison subordonnés sont forcés de déclasser. Bataille a lié cette misère à l'humanité en même temps qu'à la littérature. Selon lui, c'est l'horreur évoquée par cette misère qui en pousse à l'humanité (la raison et le discours). C'est le même rôle que celui de l'angoisse de la mort chez Hegel. Et, Bataille a appelé le maître (la figure de la philosophie de Hegel) « l'indigent » dans le manuscrit « le jeu ». Alors, ces figures miséreuses sont un aspect de la vie souveraine. Encore, cette misère a la même valeur que la révolte qui cause le ravissement, non seulement comme le résultat de l'acte non-subordonné, mais comme cet acte lui-même. Dans « le sommet et le déclin » (*Sur Nietzsche*), Bataille a trouvé la possibilité de cette révolte à choisir de rester au déclin.